

勿凝学問 220

日本の租税観と岩倉使節団

伊藤博文たちが福澤諭吉の租税論をやっきになって否定した理由はパリコミュン

2009年2月1日

慶應義塾大学 商学部

教授 権丈善一

岩倉使節団の旅程をみて遊んでいると、「勿凝学問 146 [明治期に、もし福澤諭吉の租税論を伊藤博文たちが打ち消していなければ](#)」の中で論じた、伊藤博文が福澤諭吉の租税論をやっきになって否定した理由が分かった気がした。

使節団は、1872年12月16日から翌年2月17日までパリ滞在。その直前のフランスを調べてみると・・・

1870年7月19日 普仏戦争勃発

1871年3月28日 パリコミュン設立宣言

——世界初の労働者階級の自治による民主国家

1871年5月10日 フランクフルト条約で普仏戦争終結

1871年5月28日 フランス政府軍はプロイセンの支援を得てパリ鎮圧

鎮圧時に3万人にのぼると言われる死者を出し、

4万人あまりが逮捕されて、革命の首謀者たちは粛清された

要するに、パリコミュンが鎮圧された翌年に岩倉使節団は、パリを訪れる。パリ訪問までは共和制寄りだった木戸孝允も、パリ訪問を機に「独立自由も三権分立も、よほど勘弁してかからねば大変なことになる」と記すようになる。

そして、パリを発った岩倉使節団は、ベルギー、オランダに立ち寄って、1873年3月7日、プロイセンに入り、3月15日にビスマルクの招宴に臨む。その晩餐会でのビスマルクの演説は——泉三郎『堂々たる日本人』より

当今、世界の各国はみな親睦礼儀をもって交わっているように見えるが、それはまったく表面上のことで、内側では強弱相凌ぎ、大小侮るというのが実状である。・・・万国公法なるものも大国の利のあるうちであって、いったん不利となれば公法に代わるに武力をもってする。

こういう背景を考えれば、岩倉使節団が帰国して17年後に、大日本帝国憲法の説明文としての『憲法義解』（明治22年）の中に次の説明があることが理解できるというものである。

第二一条 日本臣民は法律の定るところに従い納税の義務を有す

納税は一国共同生存の必要に供応する者にして、兵役と均しく、臣民の国家に対する義務の一たり。・・・蓋し租税は臣民国家の公費を分担するものにして、徴求に供給する献キの類に非ざるなり（求めに応じて差し出す捧げ物ではない）。亦承諾に起因する徳沢の報酬に非ざるなり（恩恵に対する支払いではない）。

最後のところに関する注釈では次のように記されている。

仏国の学者は其の偏理の見を以て租税の義を論じたり。1789年ミラボー氏が仏国人民に向かつて国費を募る公文に曰く。租税は享る所の利益に酬ゆる代価なり、公共安念の保護を得むが為の前払いなりと。エミル・ド・ヂラルデン氏は又説を為して曰く。租税は権利の享受、利益の保護を得るの目的の為に国と名づけたる一会社の社員より納むる所の保険料なりと。此皆民約の主義に淵源し、納税を以て政府の職務と人民の義務と互助交換する者にして、其説巧なりと雖、実に千里の謬りたることを免れず。

伊藤博文のみならず、中江兆民も、伊藤とは異なった視点から福澤諭吉の租税論を否定することになるのだが、なるほど、そういうことなのか、という感じである。

付録

生年	岩倉使節団						西郷隆盛	福澤諭吉
	岩倉具視	大久保利通	木戸孝允	伊藤博文	中江兆民	津田梅子		
1867 大政奉還	42	37	34	26	20	3	39	32
1868 王政復古	43	38	35	27	21	4	40	33
1871 岩倉使節団出発	46	41	38	30	24	7	43	36
1872 帰国	47	42	39	31	25	8	44	37
1877 西南戦争	52	47	44	36	30	13	49	42
1889 明治憲法公布				48	42	25		54
1894 日清戦争				53	47	30		59
享年	57	47	45	68	54	64	49	65

補論

以前から気になっていた映画「[長州ファイブ](#)」を、この文章を書いたことをきっかけにようやくみる。長州ファイブ（長州五傑）とは、幕末期に長州藩からロンドンに派遣され

た（徳川幕府からみれば密航した）井上聞多（馨）、遠藤謹助、山尾庸三、伊藤俊輔（博文）、野村弥吉（井上勝）の 5 名の長州藩士のことである。

映画では、ロンドンに着いた彼らが、鉄道に驚く、しかも 30 年前から鉄道が走っていたことに驚嘆するシーンがある。しかし私のはるか昔にビックリした話は登場しなかったので、ここに紹介しておく。

1863 年 1 月 10 日 ロンドンで世界初の地下鉄開通（パディントンーフェアンドン）

1863 年 5 月 12 日 伊藤博文，井上聞多らが海外密航留学に出発

11 月 4 日 ロンドン到着

要するに、彼ら長州ファイブがロンドンに到着したとき、ロンドンには地下鉄が走っていた——ということは、地上には今と変わらぬ石造りの街並みができあがっていたのである。ちなみに、当時の地下鉄は蒸気機関車であり、労働者の運搬のために敷設されたものであった。